

巻頭言

杏林医学会のこれからに向けて

杏林医学会副会長 保健学部 大 瀧 純 一

杏林医学会は医学部、医学部付属病院、看護部および保健学部の教職員が、主たる会員になっております。平成18年までは年1回の総会と研究発表会、および論文発表の場である杏林医学会雑誌の年4回発行が主たる活動状況でした。しかし、最近では様々な専門分野学会の増加や、学術雑誌の刊行があり、学位取得にあたっては杏林医学会雑誌に投稿する教職員の減少が目立つようになってきました。

そのような状況を鑑み、平成19年から杏林医学会の活動を拡大することに致しました。具体的には年1回の総会を広く市民に開放し、杏林医学会雑誌のWeb化に踏み切りました。総会では一般市民が興味関心を示すようなテーマを設定し、専門家集団である杏林大学の教職員の知恵を提供しようというもので、平成19年度は認知症、平成20年度はインフルエンザについて行いました。時流に乗っていることもあり、多くの市民が訪れ、熱心に耳を傾け、多くの質問がなされ、非常に活況で思惑どおりの状況でした。今までも杏林大学として、総合政策学部、外国語学部も含め全学あげて市民向けに公開講座の形式で、毎年十数回行なっていますが、杏林医学会総会時にはさらに一歩進め、1つのテーマを専門分野に応じて複数の講師が話をするといった、非常に贅沢な講座を提供することにしました。ここ数年「地域に貢献し、地域に根づいた大学」が重要と言われ、様々な大学が様々な地域貢献を行っている昨今ですが、杏林医学会の活動も、多摩地区にあって地域貢献の重要な位置を占めていきたいと思っております。

一方、杏林医学会雑誌は発刊当初から、医学部、保健学部を始めとする教職員や大学院生の発表の場であり、学位論文掲載の場でもありました。現在でも勿論それらは非常に大きな柱である事には変わりありませんが、時代の流れとともに、よりスピーディーに、より開かれた場へ、をモットーに発展させて行くのが必要と思っております。杏林医学会雑誌はいわゆる紙媒体の雑誌から、Web上での公開になって1年が経過しました。形態を変更したことで、多少の混乱はありましたが、順調に推移しております。

これからの杏林医学会は杏林大学教職員一人一人の熱意にかかっております。一人一人がお互いに信頼し、自分の持てる力を十分に発揮する事が必要とされております。これからの杏林医学会の発展に、ぜひ皆様方のお力を、お貸しいただきたいと思っております。